



# 第6編

## 特別委員会活動

### 主な内容

1. 規格委員会.....	285
2. 出版委員会.....	296
3. 安全衛生委員会.....	300
4. 特許委員会.....	310
5. 国際活動委員会.....	317

当協会の特別委員会は、規格、出版、安全衛生、特許及び国際活動の5つの委員会である。

まず、規格委員会であるが、この10年は当協会の中でも最も多忙な委員会であった、といっても過言ではないであろう。IIWの第 委員会から移行した Select Committee "Standardization", ISO/TC44, CEN/TC121 等の国際会議への出席や対応、国内的にはJISの国際規格への整合化に伴う協力、日米標準化イニシャティブへの協力、溶接要員認証制度の大幅な改訂に伴う規格・基準面での改訂協力、ISO 9000 シリーズ (JIS 9900 シリーズ) の溶接版規格 ISO 3834 並びに関連規格 ISO 14731, ISO 9606, ISO 9956 等のJIS化への協力など、かつて経験したことのないほどの忙しさであった。この忙しさは21世紀になっても、当分の間継続するであろう。

日米標準化イニシャティブの活動は始まったばかりであるが、日米がISO規格案の提案国として規格作りに多忙を極めるであろう。また、溶接材料規格の一部で認められる可能性の出た、ヨーロッパ形の規格と、日米形の規格との共存案の考え方は、日米として他の分野へも普及させていきたいところである。

WTOのTBT協定の締結を受けて、国際規格の分野において日米の果たすべき役割が明確になりつつあり、また一層の重要性を帯びてきている。それにつけても、政府や関係機関の一層の指示や援助が望まれるところである。

出版委員会は、出版事業の重要性がますます高まる中で、1988(昭和63)年には活性化を図るために、当協会と産報出版との間で業務分担の明確化と協調体制強化を目的として、両者の協力による出版管理体制が再構築された。この中では、協会事務局と産報出版との間の緊密な連絡が肝要であるとの観点から、日溶協・産報出版事務連絡会が設置されている。

安全衛生委員会は、安全衛生に関する各種WES及びJIS規格などの基準化の審議、内外規格の調査などの他に、IIW第 委員会への対応などの活動を行っている。そのような中で、1991(平成3)年10月には「安全衛生委員会20年史」を編纂した。

労働省は1981(昭和56)年より、4次にわたって粉じんにかかわる適切な作業環境管理、健康管理、労働衛生教育などの徹底を内容とする総合的な対策を推進してきた。そしてこの度、1998(平成10)年度を初年度とした5カ年計画による、第5次粉じん障害防止総合対策推進要領を策定のうえ、日本溶接協会長に対して推進運動を実施するよう要請があった。

この要請を受けて、さっそく「粉じん障害防止対策推進運動実施計画書」を作成し、当協会支部を含む全国規模でじん肺撲滅の運動を推進することになっている。溶接の安全衛生に関する問題点は、必ずしも明らかではなく、今後の調査・研究が重要である。従来に倍してIIW, ISO委員会への出席及び世界各国との連携を密にして、研究・調査を行っていかねばならない。

特許委員会は、特許部会の時代から特許関係者による講演、説明懇談を開催し、その内容を広く関係者に伝えるために、「溶接ニュース」への記事、「溶接技術」への記事として掲載してきた。

過去25年のアーク溶接に関する特許出願の傾向が、発明協会によって調査されているが、溶接装置・制御に関する出願が卓越している傾向がうかがえるものの、出願は広い範囲に及んでおり、アーク溶接技術が依然として産業の基盤技術であることを示唆している。

国際活動委員会は、ボーダーレス、グローバル化の風潮が進む中で、ますますその活動の重要性が増してきている。最近の傾向は、単に相手国を訪問しあうだけに留まらず、共同してイベントを共催するとか、事業への協力などの動きがでてきている。過去数年の間に、アジア地区の8カ国の溶接団体と相互事業協力協定を締結してきた。

今後、アジア地区の国々に対する協力関係の維持は、当協会の国際問題に関する最大関心事の一つになるであろう。アジア地区の力を、協定をテコとして、国際社会の場でどのように引き出せ、利用できるか当協会の国際的な力量が試される時代にきている。